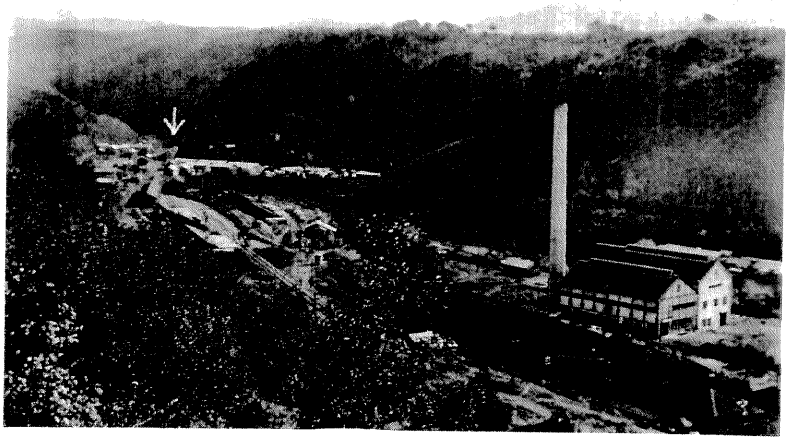
七、電力を求める苦心

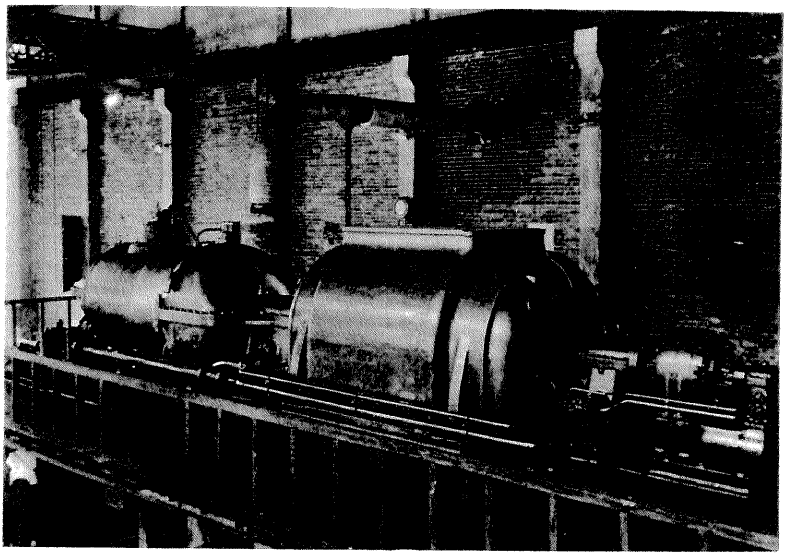
丹那トンネルの三島口には、二百呎近くもある鐵筋コンクリートの煙突のある堂々たる建物があります。これは火力發電所です。今では伊豆地震で外壁が落ちた處も直さずに、ほうりつぱなしになつて居りますが、この建物こそ工事着手時代の電力を求める苦心を物語る記念物なのです。

短いトンネルなら今でも、鑿と槌とで、トンカントンカンと、ダイナマイトをつめる穴を掘つて居りますが、長いトンネルになると、こんな呑氣な、のろまな事では仕事になりません。どうしても機械を使ひ、壓搾空氣で鑿岩機をドツトと動かし、鑿を廻し、岩をくり、深くあけた穴には、充分ダイナマイトをつめて、ドカーンと大きく地山をおこして、崩した土砂をトロに積込んで電車かなんかで、どんどん運び出さなければなりません。又各人カンテラを持參するのも能率の悪い話ですから、電燈もつけなければなりません。尙ダイナマイトの煙で汚れた空氣を吸ひ出す通風機も入用です。それにはどうしても大量の電力が必要です。

此の電氣をどうして求めるか、これは大きなトンネルを掘る場合に第一に考慮しなければならない問題です。丹那トンネルが通る山の中も、今では一帶に電氣が行き亙り、どんな百姓家にも電燈がともつて居て、工事着手當時とは、大變な違ひですが、其の當時丹那トンネルに必要な電力をどうするかと謂ふことは、大きな問題でした。自營でやらうか、最寄の電氣會社から買ほうか、自營とすれば火力か水力か、こんな問題があつたのです。それで水



大竹火力發電所と三島口工事場全景、(↓)が三島口坑門。



同發電所内設備の一部。

力の方を一應調査する事にしました。

水力の候補地としては、天城山に源を發してゐる狩野川に目をつけて、瀧山與技師と、電氣の井上昱太郎技師とが、此の川筋をずつと踏査しました。調査の結果は狩野川の本流に數箇所、支流の猫越川にも、適當な處があり、大體七八千キロワットの電力が得られる見込がついたのでした。併し調べた結果、何れも既に權利が他人の手にあつて駄目でした。併し之れ以外に新に水力を求める見込もつかなかつたので、水力に依ることは結局斷念することになりました。

それで、此の附近で電力を供給して居る、當時の富士水電株式會社に交渉して、其れから供給して貰うと謂ふことになりました。白井社長を呼んで交渉した結果は、初年度は六百馬力、翌年からは順次使用量を增して七年目に終了と謂ふ條件のもとに、一キロ一錢六厘と謂ふ約束が出來ました。社長が直接承知したことだし、これで電力問題も先づ解決だと思ひましたが、當時此の交渉を口約束だけでいゝと思つたのは、大きな間違のもとでした。トンネル掘鑿の準備も漸次はかどつて、愈々電力の供給を必要とする樣になつたのは、それから一年半の後になりました。そこで再び社長を呼んで前年の口約束を履行しようと申出でました。處が、意外にも倍額の三錢二厘でなければ御受け出來ないとの返事だつたのです。一年半も前の交渉を今もち出しても、それは無理だと謂ふのです。成る程考へて見れば、無理もないことで、一年半前と其後とでは、歐洲戰爭が初まつて景氣ががらつと變つて居つたのです。こんな經濟界の事情等に關心をもたない律義な役人の氣分からは、此の違約は決していゝ氣持のものではあ

りませんでした。「約束を裏切る樣な者から買ふもんか」と謂ふ反感も手傳つて、とう〳〵電力は自營火力發電と謂ふことになりました。之れで、あわて〻機械を買ひ集め今の三島口の發電所が生れることになりました。竣工したのは大正十年春頃でしたが、電氣の山根幸人技師が主として之を擔當しました。發電所の規模の大體は

蒸汽罐	田熊式	四百馬力	四臺
蒸汽タービン	米國アリスチャルマー會社製	四千馬力	一臺
發電機	米國アリスチャルマー會社製	三、〇〇〇キロボルトアムペアー	一臺

で、發電能力は大略二、五〇〇キロワット(三、〇〇〇馬力)でした。

こんないきさつもあつて、發電所が出來たのですが、いざ出來上つて運轉しようとなつた時分には、歐洲戰爭終了で、又世間の景氣は一轉してしまひました。そんな關係で、骨折つて作つた發電所も、實際運轉したのは、たつた二ケ月位なもので、大正十年秋からは、又初めの計畫にもどり、會社の電力を買うことになりました。景氣がいい時には高くもち出し、工合が悪くなると、安く泣き込んで來るのですから、全く商賣人にはかなひません。併し當時の會社の電力は今と違つて、ともすれば停電があり、又月二回の公休も仕事に差支へましたから、其後も長い間、時々發電所は運轉をして居りました。殊に空氣掘鑿(空氣掘鑿の話參照)をやつた時分には、一時も空氣の供給を絶やすことが出來ませんでしたから、この發電所を短期間乍ら利用しました。其後富士水電が東京電燈と合併され、供給電源も一ケ所からでなくなる樣になり、停電事故の心配も無くなつて、公休も無くなつたので、昭和三年頃から、此の發電所も全く立ち腐れの運命となつてしまひました。思へば、はかない運命の發電所でした。何んでもあの白い高い煙突は、今では此邊を通る飛行機のいゝ目標となつて居るさうです。熱海線が全通した曉には、廣告塔に利用したら如何んなものでしよう。取り壞すにも費用がかゝりますから。